

ヘブル人への手紙12章14-29節 「恵みを拒まない注意」

1A 平和の追求 14-17

1B 聖さ 14-15

2B 俗悪さ 16-17

2A 近づいている山 18-24

1B 恐れて震えるシナイ山 18-21

2B 大祝会に満ちるシオン山 22-24

3A 天からの警告 25-29

1B 地上よりも厳しい処罰 25

2B 揺り動かされない御国 26-29

アウトライン

ヘブル人への手紙 12 章の後半を学びます。私たちは前回、神の訓練について学びました。迫害を受けて、疲れてしまい、ユダヤ教に戻ろうとしているユダヤ人信者に対して、著者は旧約時代の聖徒たちの証言と、イエスご自身の罪人の反抗に対する忍耐を教えました。そして、これらのことが起こるのは、神が彼らを憎んでいるからではなく、むしろ愛しているからであり、その訓練によって神の聖さにあずかり、平和の義の実を結ぶことができるようにするためでした。そこで著者は、平和を追い求めることについて、また聖さを求めることについての強い勧めを行ないます。

1A 平和の追求 14-17

そして著者は、勧めを行ないます。

1B 聖さ 14-15

14 すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。

困難や迫害のある中にあるからこそ、追い求めなければいけないのは「平和」です。平和を「追い求める」、また聖められることを「追い求める」とありますが、これが単に「求める」となっています。ギリシヤ語も、かなり能動的な追い求めるという言葉が使われています。その周りには、争いや妬みが満ちているので、気をつけていないと自分自身はその汚れの中の入ってしまいます。逆に言えば、それだけ能動的に動くことによって、神の御霊が力強く働いてくださいます。「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。『いのちを愛し、幸いな日々を過ごしたいと思う者は、舌を押えて悪を言わず、くちびるを閉ざして偽りを語らず、悪から遠ざかって善を行ない、平和を求めてこれを追い求めよ。』(1ペテロ 3:9-11)」

そして「平和」に必要なのは、「聖められること」です。著者は「すべての人と」と強調しており、自分の気の合う人とだけ平和を保つのではなく、自分と気に合わない人に対しても、同意できない人に対しても、平和を追い求めます。そこに必要なのは、心の聖めです。自分自身の心が聖められているからこそ、自分を追い求めない、神の平和を追い求める無私の態度を取ることができます。

そして、「聖くなければ、だれも主を見ることができません。」と言っていますが、これはイエス様の山上の垂訓の御言葉ですね(マタイ 5:8)。私たちが思い出さなければいけないのは、私たちはイエス・キリストにあって、永遠の救いとその聖めを受けているということです。「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。(ヘブル 10:14)」主がお与えになった聖めから、私たちは目を離してはいけません。そして、この方が最後まで罪人の反抗を忍ばれたことをから、目を離してはいけません。イエスにこそ、私たちは聖めの源泉があります。そして次に著者は、警告を与えます。

15 そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、

ヘブル書にある勧め、また警告は、「監督すること」です。あるいは「注意する」という言葉がありました。「きょう。」と言われていた間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。(3:13)」また、こうありました。「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。(10:24-25)」

よく注意して、よく監督しなければ、ここにあるように「神の恵みから落ちる」ようになってしまいます。私たちがこれまでヘブル書で学んできたように、イエス・キリストがただ一度、ご自分の肉体を罪のいけにえとしてささげて、その流された血を天の聖所に携えたので、私たちは心の良心から全ききよめを受けることができ、神に近づく、お仕えできるようになりました。これが神の恵みです。しかし、ユダヤ人信者は自分の身に降りかかる困難のゆえに、そこから離れて迫害を免れようとしていたのです。これが神の恵みから落ちることです。

私たちは、絶えず信仰の戦いの中にあります。何らかの形で、サタンは私たちを神の恵みから引き離そうとします。だからよく監督しなければいけないのです。

そして、「苦い根が芽を出す」ということがあります。前回の学びで、私たちが神からの訓練を受ける時に、二つの選択肢があることをお話ししました。神からの訓練、あるいは懲らしめを受けた時に、へりくだって、神の愛を知って、その聖さにあずかる道があります。忍耐を学び、霊的に成長し、成熟に向かいます。もう一つの道は、苦々しくなることです。自分が成長することを放棄して、

神に対して、そして人に対して苦々しく思うことです。そして、罪を犯してもいいや、となって俗悪になっていくという道です。

苦みを持つことは、自分の心の中だけで収まりません。「多くの人が汚され」ます。心の中で、不満がたまります。そして他者への批判へと向かいます。教会やその指導者に対する批判を始めます。このようにして、キリストの体に亀裂をもたらします。

3B 俗悪さ 16-17

16 また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がないようにしなさい。

今、話しましたように、困難に直面する時、神に取り扱いを受ける時に苦みをもって反応すると、その心は他の罪を犯す温床となります。「不品行」を犯すのは、この場合、落胆して、キリストにある希望を捨ててしまうからです。

そして著者は、エサウを例に出しています。「俗悪」という言葉を著者は使っていますが、これは「ただの人」あるいは「世の中のものを求める人」ということであります。目の前にある欲求を満たすために、長子の権利という霊的なもの、神の約束をいとも簡単に捨ててしまうことであります。

17 あなたがたが知っているとおりに、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。

ヤコブがエサウに扮して、父イサクが与えた祝福をヤコブが受け取った時のことです。エサウが祝福を相続したい、そして涙して求めたけれども、心を変えてもらう余地がなかった、という話は、あたかも彼が悔い改めて霊的なことを追い求めたかのように聞こえますが、そうではありません。彼が追い求めていたのは、この地上の事柄だけでした。獵をして、また周囲のカナン人の女をめぐり、アブラハムから受け継がれた神の約束については度外視した生活を送っていました。そして父イサクから祝福を受ける時も、それは地上の祝福を求めたのであって、神の約束を求めたものではありません。その涙は後悔の涙であっても、神を求め、へりくだって罪を悔い改めたのではないのです。

「俗悪」という言葉はかなり強いですが、エサウは世の中においては普通の人に違いませんでした。獵師として優れており、スポーツマン型の人だったと思います。そして父を愛する人でした。けれども霊的な事柄に無関心だったのです。しかし、これが致命的なのです。

ここでなぜ著者がエサウの話をしているのかと言いますと、ユダヤ人信者も神の恵みから離れて、ユダヤ教またユダヤ人共同体の中に戻るのであれば、エサウのように後戻りはできないとい

うことです。キリストを求めていながら罪を犯してしまうのと、キリストご自身を否むことは意味が違います。キリストの十字架を捨てて、なおのこと救いを得ることは不可能であるということ、ここで著者は言いたいのです。

2A 近づいている山 18-24

そして、ヘブル書の中にあった一連の警告の最後が 18 節以降にあります。これまでいろいろな警告がありましたが、それは新しい契約にある神の恵みを拒むとどうなるのか？というものでした。著者は最後に、旧約が与えられた山と、新約の中で約束されている山を比較対照しています。

1B 恐れて震えるシナイ山 18-21

18 あなたがたは、手でさわれる山、燃える火、黒雲、暗やみ、あらし、19 ラツパの響き、ことばのとどろきに近づいているのではありません。このとどろきは、これを聞いた者たちが、それ以上一言も加えてもらいたくないと願ったものです。20 彼らは、「たとい、獣でも、山に触れるものは石で打ち殺されなければならない。」というその命令に耐えることができなかったのです。21 また、その光景があまり恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れて、震える。」と言いました。

古い契約が与えられたのは、シナイ山においてです。その時の様子は、ここに形容されているように非常に恐ろしいものでした。それは律法の性格をよく表しているものでした。律法は神の聖なる御姿と、また罪ある者たちを裁くという神のご性質を表しているものでした。イスラエルの民が、神とその律法について、真剣になるように神が彼らを試すために、敢えてご自身の姿の一部を表されたのです。

著者は、これに「近づいているのではありません」と話しています。つまり、古い契約は律法による罪定めと死をもたらすのであり、それらにあなたがたは近づいているのではないと励ましています。イエス・キリストにある恵みから離れて、ユダヤ教の中に戻ろうとする人々に対して、律法の実体を思い出してほしいという意図があるに違いありません。

2B 大祝会に満ちるシオン山 22-24

22 しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。23 また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、24 さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。

これが神の恵みによって、信者たちに与えられている行き先です。シナイにある山ではなく、シオンにある山であります。けれども、今ある地上のエルサレムのことではありません。神の御座がある天そのものであり、新しい天と新しい地において、その新しい地に降りてくる天のエルサレムのことであります。11 章で、族長たちが待ち望んでいる都が、この都であることを教えていました(16

節)。使徒パウロは、同じく律法に逆戻りしようとしたガラテヤにある教会に対して、上からのエルサレムについて話しています。「このハガルは、アラビアにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、彼女はその子どもたちとともに奴隷だからです。しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。(ガラテヤ 4:25-26)」そして、もちろん黙示録の最後の幻は、あの光り輝く天のエルサレム、神の都であります。

その都の特徴は、シナイ山における恐ろしい暗闇とは正反対に、大祝会であります。「無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。」イエス様が、悔い改める者がいたら御使いたちに喜びが沸き起こることを語られました(ルカ 15:10)。この天のエルサレムが私たちに近づいています。主イエスが戻ってきて教会が引き上げられれば、その祝会を目の当たりにします。そしてもちろん、千年王国の後、新天新地の秩序の後には永遠のその都に住むのです。この都が自分に近づいているから、私たちの魂は喜びに満たされるのです。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。(1ペテロ 1:8)」

ある時、他の教会に通っておられる姉妹と話す機会がありました。彼女は、その教会以外に他の教会に移ろうか迷っていたそうです。けれども、その教会に通うのだ、ここが自分の教会なのだ と決心したそうです。すると、興味深いことに、牧師の説教によってこれまで聞こえてこなかった神の御声が聞こえてきたと証しておられました。また教会の兄弟姉妹との交わりにおいても、これまで見えていなかったものが見えてきた、と証してくださいました。すばらしいことです。実は同じような証しを、私の友人の牧師さんが、ご自身が副牧師だった時に体験したと語っておられます。

全ての人と平和を追い求めると、神を見ることができ、天のエルサレムの前味を楽しむことができます。私たちは困難な時代に生きています。そこで、先ほど話したように、兄弟姉妹や指導者につまずき、苦みを持つことがいとも簡単なこの世になっています。先ほどの姉妹や牧師が苦みを持っていたということではありません。けれども、私たちが神の恵みによって、そこにあるキリストの平和を享受している時に、私たちには最終的地点である天のエルサレムに近づくことになるため、魂が喜びに満たされるということです。

著者は、天のエルサレムについてもっと具体的に書いています。「天に登録されている長子たちの教会」と言っていますが、イエス様は救いの本質を、天に自分の名が書き記されているかどうかで言い表されました。「長子の教会」とありますが、おそらくは代表者たちという意味でしょう。黙示録 4 章から、御座の回りに 24 人の長老がいて、自分の冠を投げ出して主を礼拝している姿がありますが、彼らは全教会を代表しているのでしょうか。したがって、これは聖霊が弟子たちに与えられて教会が始まって、教会全史に貫く聖徒たちのことであると考えられます。

私たちは、その五旬節の時以来の人々と、天においてもまだ生き残っている地上にいる私たち

においても、一つにつながっている普遍的教会であります。私たちは、日本のカルバリーチャペルが一堂に会するカンファレンスがありますが、それが全世界的に、全歴史的に天において行われるのです。

そして次に、「万民の審判者である神」とあります。最後の審判において、万民を神は裁かれます。この方がおられて、それから「全うされた義人たちの霊」とあります。その後、アベルが流した血が書かれています。旧約の時代に神の約束を信じて死んでいった聖徒たちの霊のことでしょう。彼らは死後、陰府に下りました。けれども、イエスが死なれて贖いを全うされ、陰府に下って勝利の宣言をされました。そして旧約の聖徒たちはキリストと共に天に引き上げられました。ですから新約時代の聖徒たちのみならず、旧約時代の聖徒たちもいるのです。

そして、万民の審判者と全うされた義人の霊の組み合わせは、アベルのように迫害を受けて殉教したとしても、真実と正義をもって必ず裁いてくださる方がおられることを表しています。

それから、「新しい契約の仲介者イエス」がおられます。天のエルサレムが、恐ろしく震えるものではなく、大いなる喜びであるのは、もっぱらその契約の仲介者がイエスご自身であるからです。そして、「アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血」とあります。アベルは、兄カインによって、そのいけにえのゆえに妬みを抱かれて、殺されました。アベルはイエスの型です。肉の兄弟であるユダヤ人にねたみを抱かれて、それで殺されました。けれども、アベルよりも優れたことを語っています。アベルの血はその不義について、裁きを与えられるよう叫ぶ血であります。イエス様の血はそのような叫びではなく、新しい契約を締結する印そのものであります。

天のエルサレムの中樞は、この注ぎかけの血であるのです。黙示録の天のエルサレムにおいて、この方は「小羊」と呼ばれています。この方が流された血によって天の聖所がきよめられたのですから、その血は永遠に思い出されるのです。

3A 天からの警告 25-29

そこで最後の警告を著者は行います。

1B 地上よりも厳しい処罰 25

25 語っておられる方を拒まないように注意なさい。なぜなら、地上においても、警告を与えた方を拒んだ彼らが処罰を免れることができなかつたとすれば、まして天から語っておられる方に背を向ける私たちが、処罰を免れることができないのは当然ではありませんか。

10章 26-31節において、神の恵みと新しい契約を侮る人は、旧約時代の処罰よりもさらに重い処罰があることを著者は警告していました。ここも同じです。地上において警告を与えた、というのは、シナイ山において律法によって、モーセを通して神が警告を与えられたということです。その警

告に聞き従わない者たちは、処罰されました。例えば、金の子牛を拝んで殺された者たちもいるし、貪りの罪を犯して死んだ者もいるし、コラのような反逆の罪で死んだ者もいます。

しかし、神はこれらの律法の違反をすべて、キリストの上に置かれました。この方が肉体を取られて、その肉体の上に処罰を置いてくださいました。このことによって、神の御座の置かれている天への道が開かれています。この究極の仲介者を拒むということは、残りの仲介者は存在しないこととなります。究極の恵みに対して、それに正しく応答しなければ究極の処罰があります。

私はこの箇所を読んで、恐れを抱きました。それは、不信者の行く末に恐れを抱いたということではなく、神の恵みがいかにすぐれているのか、それを未信者に伝えられているかどうか、ということでもあります。教会がキリストの満ちておられるところで、そして神の恵みがキリストにあって完全に現れていることを、どこまで礼拝によって、御言葉の説き明かしによって伝えられているのかどうか、ということでもあります。これだけすぐれた恵みであるのに、人間中心のことを語ったり、律法主義的なことを語ってしまえば、知らずに死んでいき裁かれることとなります。

2B 揺り動かされない御国 26-29

26 あのとときは、その声が地を揺り動かしましたが、このたびは約束をもって、こう言われます。「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」27 この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。

「あのととき」とは、シナイ山の時のことです。神の声によって地が揺り動きました。けれども、預言者ハガイは、「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」という神の御言葉を語りました。地だけでなく、天をも揺り動かす大異変によって、その後キリストが再臨し、神の御国がもたらされます。

ハガイ書 2 章の該当箇所を読みますと、その後、「わたしは、すべての国々を揺り動かす。(7 節)」とあります。したがってこれは、単なる自然現象としての大異変だけでなく、政治的、経済的、社会的な大異変をも前兆としています。私たちの生きている時代がまさにそうになっています。いや、まだまだその揺り動きは小さいものです。黙示録に予告されている患難は、私たちがいま通っている異変を全く小さいものにしてしまうほど、大きなものであります。

私たちは、日々の生活の中で埋もれています。いや、自らを埋もれさせていると言ったらよいでしょう。世界で起こっている異変があまりにも多いので、それから目を逸らしたいからか、自分たちのことだけに目を向けようとする傾向があります。自分の今の生活が良ければそれでよい、自分自身が幸せであることに集中しよう、という考え方です。実はこのような考え方こそが、終わりの日の特徴であることを使徒パウロは警告しました。「終わりの日には困難な時代がやって来ることを

よく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者・・(になるからです。)(2テモテ 3:1-2)」

しかし、私たちキリスト者は、これらの異変に対して全く動じない態度が必要です。なぜなら、私たちが受け継ぐのは、これら天と地が揺り動かされてもなおのこと残る御国だからです。「しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならぬことでしょう。(2ペテロ 3:10-11)」私たちが世界の異変、そして日本の異変を知る時に、心を引き締めて、なおのこと残る御国を思いながら、聖められることを追い求めなければいけません。

28 こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。

ここに書かれている、「感謝しようではありませんか」の元々の意味は、「恵みを持つようではありませんか」となっています。私たちに、この天地が崩されてもなおのこと残る御国が与えられています。そして、そこに入るのはもっぱら、神の恵みによるのです。この恵みに触れる時に、私たちはむしろ慎みと恐れを抱きます。神の恵みを知って、「これで私は罪を犯しても大丈夫だ」と安心する人は、なおのこと神の恵みを知りません。

聖なる神が、罪の中で死んでおり、御怒りを受けるしかない私たちを、ご自分の御子の死によって贖ってくださったこと。このことを真実に受け止めるならば、私たちは恵みの前で、全く別の意味で震えます。恐れを抱きます。それは、自分のしていることを是認してくれるような安価な恵みではありません。自分のしていることは事実、神の激しい怒りを受けるに値するのです。是認どころか、拒まれ、いっさいお前を知らないと言われ、暗闇の中で歯ざしりするような類いのものです。それなのに、その一切の苦しみをイエス様が受けてくださったという恵みです。この圧倒的な恵みに触れた者は、慎みと恐れを抱きます。そして、神に喜ばれるように奉仕をしたいと願います。

29 私たちの神は焼き尽くす火です。

これは、天からの声、神の恵みの声を拒んだら、神は焼き尽くす火をもって臨まれるということです。この御言葉は決して神の恵みと相反しません。むしろ、一つの硬貨の裏表なのです。この御言葉から、次の説明を読んだことがあります。

信仰者はこのようにして墮落をしていく。『神は愛だ』→『神は私を愛すべき存在だ』→『私を愛してくれるのが神であって、愛してくれないのは神ではない』こうして、本来は神が座るべき宇宙の中心に自分を据え、神を信じているように自称しながら、実は自分を愛しているに過ぎない人間となる。..

だから時々、こういうことを考えることは重要だ。神は神であって、人ではない。我々を怒ろうが、滅ぼそうが、宇宙の中心は神である。神が我々を愛したし愛しているのは、当然の業どころか、全くの奇跡であって、愛するどころかむしろ憎み滅ぼされるべき、蛆虫のように全く価値のない人間のために、神はご自身の御子を死に渡された。我々は、愛なる神が、正義の玉座に座っていることを忘れてはならない。

<https://www.facebook.com/photo.php?fbid=518978728112166>

神の恵みにおいて、神の究極の裁きの姿も見えてきます。そして究極の裁きの姿が見えるからこそ、神が御子を遣わして私たちの罪のために死に渡されたということが、奇跡であり、いかにすぐれた恵みであり、そして神が愛であるかを知ることができます。神が愛であるから、私たちを裁くべきではない、私たちを愛すべきだという主張の背後には、「自分は裁かれるに値しない正しさを持っている」と暗に主張しているに過ぎません。これは不幸であり、自己愛は私たちを幸せにするどころか呪いの下に置きます。キリストの贖いは、自己愛からの解放と呼んでよいでしょう。自分は自分を喜ばせるために生きるのではなく、神を喜ばせるために造られました。神を喜ばせるために生きる時に、結果として自分も幸せに生きることができます。そうではないと主張するのが自己愛であり、罪の根源であり、私たちを神から引き離すものです。

次回で、おそらく最後のヘブル書の学びになるかと思えます。信仰の共同体における生き方を学びます。